

〈資料紹介〉

雲谷等与筆の壽蔵景観図

および松隠堂景観図

京都国立博物館では、平成元年度社寺調査として黄檗宗の総本山・宇治萬福寺所蔵の作品群を調査する機会を得たが、その際に目にしたのが、ここに紹介する雲谷等与筆の「壽蔵景観図」(図3)および「松隠堂景観図」(図4)である。

壽蔵(壽塔とも呼ばれる)とは、萬福寺の開山である隠元隆琦の御靈屋のこと。そして松隠堂は同じく隠元の退院後の隠居所であつて、前者は木庵性瑠をはじめとする隠元の法弟たちにより営まれ、後者は美作津山藩主・関備前守長政の夫人・蘭室性温の遺言によつて、江戸屋敷の建物が工費二百両とともに喜捨移転された^②と伝えられている。両堂宇の創建時期は萬福寺の開創もない寛文三年(一六六三)と知られるが、完成にあたり木庵ら諸僧はその喜びを詩にあらわし、それぞれ一本の書卷となして隠元に贈つた。現在松隠堂の所蔵になる「壽蔵手卷」「松隠堂吟」と称される書卷が正にそれであつて、等与の景観図はいわばその口絵としてそれぞれこれらの中に描かれているものである。

図の説明は後にまわし、先ずは「壽蔵手卷」「松隠堂吟」の概要から述べていこう。「壽蔵手卷」は紙本墨書。縦三〇・一センチ、横一

四七二・二センチを算する長大なもので、巻頭には「天開壽域」と書された雄渾なる筆致の隠元の題字があり、次に景観図、さらに木庵による序跋・七言律詩と続く。序跋には既に述べた如き壽蔵造立の事情や本巻制作の経緯などが簡潔に記されており、その冒頭には「癸卯冬」、つまり寛文三年の冬の年紀がある。この「冬」とは、正確には壽蔵が完成をみた十一月を指すのであろう。以下は即非如一、慧林性機など二十三名の法弟たちによる七言律詩各一編をもつて構成されている。そこに詩を賦す者たちの名を順に列挙してみると、即非・慧林・龍溪性潜・独湛性瑩・独吼性獅・大眉性善・南源性派・高泉性激・弢玄道収・無心性覚・松山宗珊・月潭道澄・惟一道実・悦山定珠・□□道涌・梅谷道用・天寧道安・柏岸道節・廣林元智・□□全利・□□元廣・□□玄隼・潮音道海、となる。かかる順位は、やはりこうした書卷を制作する場合の慣例、つまり法階位の高下にほぼ依拠しているとみてよく、木庵から南源までは直接隠元に嗣法した者たち、それ以下は法孫で占められている。彼らの詩についてはここでいちいち記さないが、いずれも木庵の詩の韻字を順序通りに用いて作詩したもの、即ち次韻を試みたものであることがわかる。

次に「松隠堂吟」について。これも紙本墨書で、横の法量は「壽蔵手卷」よりやや短く一二三六・二センチを数えるが、縦は三〇・一センチで全くの同寸である。この他にも両巻には、料紙の紙質や見返しの体裁、さらには景観図の縦横の寸法、そこに捺された印章の種類など共通する部分が多々多く、同時期に制作された可能性は極めて高い。本巻の序跋の年紀には「癸卯臘月朔日」(寛文三年十二月一日)とあるが、恐らくこれは堂宇の落成日を指すものであろう。実際の制作時期はこれをやや遡ると考えてよい。内容の上でも「壽蔵

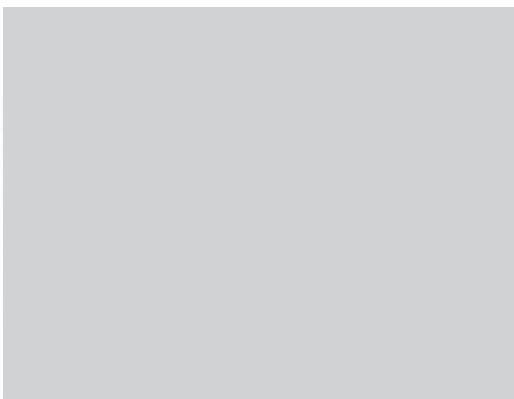
手巻」と大差はなく、やはり隠元の題字(「松隠堂」)ではじまり、それに続いて景観図、序跋があり、諸僧の詩で締め括るという構成をもつ。相違点を挙げるとすれば、序跋を木庵にかわって法弟中第三位の地位にあつた慧林が担当していること(ただし彼の詩は、木庵・即非の詩の後に賦されている)、詩を詠む法弟の数が減じられていること、そしてそれらの詩は各自二編ずつ詠まれていたことである。慧林の序跋はかなりの長文であるが、その内容は師である隠元のこれまでの経歴を述べ、その徳を称えることに終始する。本巻の制作が隠元の隠住地の完成を祝うことを目的とするものであつてみれば、かかる記述は正に理にかなつたものといえよう。ここに詩を賦す法弟は、木庵・即非・龍溪・独湛・独吼・南源・高泉・月潭の八名。いずれも「壽蔵手巻」中に詩をのこす者たちであるが、その顔ぶれが隠元にごく身近な法弟たちに限られている事実は、松隠堂の造立が喜捨に依つたもの、換言すれば壽蔵のそれように直接法弟たちがかかわつていないことに起因するのであろうか。作詩の方法は「壽蔵手巻」の場合と全く同じであり、各詩とも木庵の二詩に次韻したものである。

以上述べてきたように、この「壽蔵手巻」および「松隠堂吟」の二巻は、隠元のもと草創期の黄檗を支えた名立たる法弟たちが大挙して詩を賦したものであつて、この点をもつてしても、両巻の制作が派内においていかに重要な意味をもつものであつたかが容易に想像されよう。

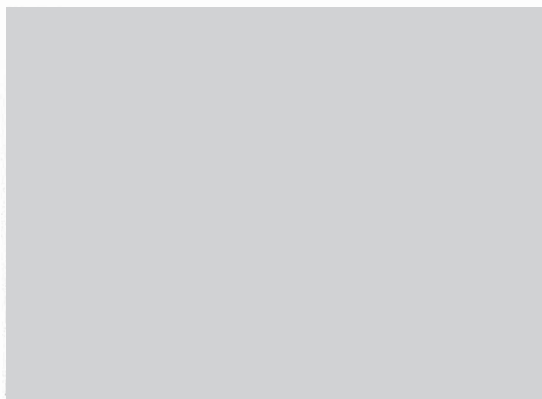
さて、図をみていくことにしたい。はじめに基本データを記すと、両図は紙本淡彩。同寸(縦三〇・一センチ 横一〇七・〇センチ)、同紙質の料紙に描かれたものである。印章も同印で、「壽蔵景観図」では画

面向つて右下隅に、「松隠堂景観図」では左下隅に「雲谷」白文瓢印一顆および「等與」白文方印一顆がそれぞれ捺されている。先ず両図で注目されるのは、

これらが実際の景観に依拠して描かれたもの、いわゆる実景図であるという点にある。例えば現在も寺内にほぼ創建当初の姿をとどめて立つ壽蔵(挿図1)と「壽蔵景観図」のそれを比較しても明らかのように、円窓や瓦葺、頂上に宝珠をそなえる点や石造基壇の形状など、両者は種々の点で一致をみるものが了解される。また、今の松隠堂は元禄七年(一六九四)に再建されたものであるため、「松隠堂景観図」との直接的な比較は困難だが、寛文九年(一六六九)から延宝二年(一六七四)頃の景観を写す「萬福寺伽藍古図」を参照する限りでは、門の配置や、柿葺と瓦葺に区別してあらわされた建物の位置関係など、多くの共通点が指摘される。その点、「松隠堂景観図」もまた、実景に即し描かれ



挿図2 等宅 樓閣山水図屏風(部分)



挿図1 壽蔵全景

たと考えて支障ないように思われる。

細部手法においては、両図とも雲谷派の特徴がよくあらわれたものといえることができる。とくにそれは、建物や石組みが定規を用いた硬質な筆線によって描写されている点、瓦葺の屋根にのる鴟尾が蟻の触角状を呈する点、あるいは松樹や小木の手法などによく看取される。これらの点については、例えば等与の従兄にあたる等宅の「楼閣山水図屏風」(挿図2)などのそれと比較すれば明らかであろう。これまで雲谷派の遺作中、真に実景図と呼びうるものは皆無であった。その意味で、両図は雲谷派による現存唯一の、しかも同派の作風の特徴が顕著な実景図として興味深い作例といわなければならない。

ところで筆者の等与(二六一—二六八)であるが、彼は雲谷派の三代目。等益の長男である。知名度の点ではさすがに等顔、等益には及ばないものの、等益没後の宗家を継ぎ、名実ともに雲谷派の頂点にあつて精力的な作画活動を展開した。毛利家の御用をつとめた関係上、遺作の大半は周防・長門地方を中心に伝存するが、興味深いことにその一方で、御所や大徳寺の塔頭・碧玉庵などに襖絵を描いたのをはじめ、京洛諸寺院に意外なほど多くの作品を遺している。こうした事實は、中央における等与の支持基盤といったものが今の我々が想像する以上に堅固で、かつ広範囲にわたるものであつたことをうかがわせる。と同時に、等与自身も宗家の立場から、そうした支持層のいつそうの拡大を意図して中央での活動を積極的に推進したに違ひなからう。「壽藏景観図」「松隱堂景観図」は、作品自体の評価とは別に、いわばこのような等与の「もくろみ」が黄檗にも及んでいたことを直に立証する作品としても注目されるのである。

黄檗僧と等与の交流関係については、文献面からもその裏付けが得られる。近年刊行をみた『黄檗文化人名辞典』の「雲谷等与」の項によれば、彼は明暦二年(一六五六)頃、当時摂津富田普門寺にあつた隠元に謁し、さらに寛文元年(一六六一)の萬福寺開創後にも隠元から「示雲谷等与画士」なる偈を得たことが知られる。また、隠元の法弟たちとも交流があつたもののように、木庵の『東来語録』中に「雲谷山人画観音大士見遺、一偈示之」の七言八句が載る他、高泉の『洗雲集』にも「贈雲谷画士」の偈が見出されるという。記念すべき「壽藏手卷」「松隱堂吟」の制作に等与が深く関与したのは、やはりかかる交流を通じて彼が黄檗内で確固たる地位を築いていたためと解釈することができよう。

等与によってその先鞭がつけられた雲谷派と黄檗僧との交わりは、やがて等与配下の画家たちを含めた関係へと拡大、発展していくことになる。等与はもちろんのこと、弟の等爾・等哲・等璠、従兄の等們的らの作品に黄檗僧の着賛したものが見出されるのはその良き証左であつて、新たな支持層の獲得という等与のもくろみは、ここにおいてようやく達成されたのである。

(山本英男)

〈注〉

- 1 『木庵禪師年譜』の寛文三年十一月の項参照。
- 2 『普照国師年譜』の寛文三年の項参照。
- 3 癸卯冬同諸法弟併両序執事造老人壽藏賦偈志喜有引
多寶現瑞七佛降靈皆以七級表七覺支五層表五分法身役之若師若弟以德
報德者莫不疊石結室剪木為龕以備師之歸根之所是可謂為周始肇為漢始
沛矣遂与諸弟造浮圖於萬松岡圖報師德而事類類繁沛也藤當蓋尖敬賦偈
志喜諸昆仲亦忻然唱和特書呈上老和尚作長生圖軸以垂太和萬古風雅云

爾 恭次

本師和尚松隱堂尊韻奉呈有序

五常德備人之經也四序功成天之道也德備則知無幽而不顯功成則知無往而不復既明顯復之機自合進退之轍吾師化運東行已經十霜開創禪叢鼎新法苑功德周隆人天統攝庶事雍熙群情踴躍起而思隱亦其宜也適有松隱道婆投誠化日愾慕宗風當於撒手歸真之際不違本願囑華居捨于黃檗萬里航輪而又捨金資築不費纖力恍若飛來宮殿從空而降信知因緣湊合采隱之懷油然而生遂將所捨移蓋萬松岡右卜云其吉于焉允威或時偃息草茵石几之上或時放曠濃陰鎖綠之傍清風不呼自至萬類獻馘盈前娛樂之襟高詠之致併將山色溪聲收拾筆尖而追隨弟子等忍俊不禁慶而續之于後大似添輪王藏中一塵耳雖然不登山不知天之高不臨淵不知地之厚若論吾師筆尖豈但山色溪聲乃至三千大千世界極而至于威音那邊更那邊亦不離吾師之筆尖也

時癸卯臘月朔日性機拜序

5 『重要文化財万福寺修理工事報告書』(京都府教育委員会、昭和四十七年) 参照。

6 『両序執事記建立殿舎冊』および棟札による。

7 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編、思文閣出版、昭和六十三年。

8 管見の範囲で確認される黄檗僧着賛の雲谷派作品は次の通り。

〔筆者〕	〔作品名〕	〔所蔵〕	〔贊者〕
等益	〔山水図屏風〕		即非(後賛)
等与	〔臨濟禪師像〕		即非
〃	〔臨濟禪師像〕	観音院	大眉
〃	〔出山釈迦図〕		木庵
等爾	〔臨濟禪師像〕	西林寺	即非
〃	〔杜子美図〕		独立
〃	〔達磨図〕		高泉
等哲	〔達磨図〕		高泉
等瑠	〔龍虎図〕		木庵
等的	〔出山釈迦図〕		南源

等室 〔仏国国師像〕 岩国徴古館 隠元
〃 〔竹雀図〕 〃 独立

なお、後二図の筆者の等室(斎藤)は岩国藩吉川家の御用絵師。同家には賛者のひとりである独立が藩主広嘉の治療のため、都合四回にわたって出入りしており、着賛もこの時になされたものとみられる。「仏国国師像」への隠元の着賛も、恐らくはこの独立を介して行われたのであろう。従って、等室と黄檗僧との交流は、等を中心としたそれとは別に把握される必要がある。